

他者との共同注意と情動共有が負の情動処理に与える影響

—事象関連脳電位による検討—

氏名 高島 幹

指導教員 高橋 伸幸

日常生活において、家族や友人といった他者と一緒に過ごすことは多くあるだろう。そこで、他者との接触により行動や認知、情動が変化することを社会的影響という。式部(2014)は、社会的影響と情動の関連に焦点を当て、自己への危険信号としての適応的な役割を持つ負の情動に、他者存在が与える影響を検討した。その結果、他者存在によって負の情動が抑制された。しかし、その背景には他者存在以外の様々な要因も関与しており、“純粋な”他者存在が影響したかは定かでない。そこで、本研究では、先行研究の多くにみられた共同注意という現象に焦点を当て、共同注意の有無が負の情動に与える影響を実験的に検討した。本実験は、1人で課題を行う“他者なし条件”と、同じ課題を行う他者が横にいる状態で課題を行う“同課題他者あり条件”，別の課題を行う他者が横にいる状態で課題を行う“別課題他者あり条件”の3条件を設定した。参加者は、画像注視課題を実施し、ランダムに選ばれた試行においてのみ、情動喚起刺激写真に対する主観的評価を評定した。また、負の情動の脳内処理を検討するのに有効な後期陽性成分 (LPP)を用いて、情動を生成プロセスと減弱プロセスに分割して検討した。本実験の結果、主観的評価では、他者なし条件と別課題他者あり条件よりも同課題他者あり条件で負の情動が抑制され、共同注意の効果がみられた。一方、負の情動の生成プロセスでは刺激の効果のみで、共同注意の効果はみられなかった。減弱プロセスにおいては、生成プロセスと同様の結果がみられたが、同課題他者あり条件と視点取得項目との間に負の相関がみられた。本実験では、共同注意の有無が負の情動処理に影響したことから、負の情動処理への影響をより明らかにするには、共同注意と情動との関連を今後も検討していく必要があるだろう。